

よみがえる画家  
板倉 鼎・須美子展

Kanae & Sumiko Itakura

関連イベント

ギャラリーツアー

- ① 4/15(土) 14:00~15:00
- ② 5/6(土) 14:00~15:00
- ③ 5/13(土) 14:00~15:00

①②は猪狩智子(東京藝術大学)、③は山田敦雄(目黒区美術館)

記念レクチャー

「板倉鼎と須美子、二人のタイムカプセル」 田中典子(松戸市教育委員会)

4/29(土・祝) 14:00~15:30

※当日先着60名様、事前のお申し込みは不要です。

大人のための美術カフェ

「1920年代のパリと板倉夫妻」 山田敦雄(目黒区美術館)

5/27(土) 14:00~15:00

※いずれの催しも聴講無料。ただし、当日の観覧券が必要です。

※上記内容等は変更される場合があります。詳細は当館ウェブサイト等でご確認ください。

入館料

|           |           |                      |
|-----------|-----------|----------------------|
| 一般        | 800(600)円 |                      |
| 高大生・65歳以上 | 600(500)円 | 障がいのある方は半額、その付添者1名無料 |
| 小中生以下     | 無料        | ( )内は20名以上の団体料金      |

目黒区美術館では、開館30周年を記念して区民割引を実施いたします。目黒区内在住、在勤、在学の方は受付で証明書類をご提示頂くと団体料金になります。(他の割引との併用はできません。)



開館時間：午前10時～午後6時(入館は午後5時30分まで)

休館日：月曜日

特別協力：松戸市教育委員会

主催：公益財団法人目黒区芸術文化振興財団 目黒区美術館

目黒区美術館 153-0063 目黒区目黒 2-4-36  
Tel.03-3714-1201

www.mmat.jp

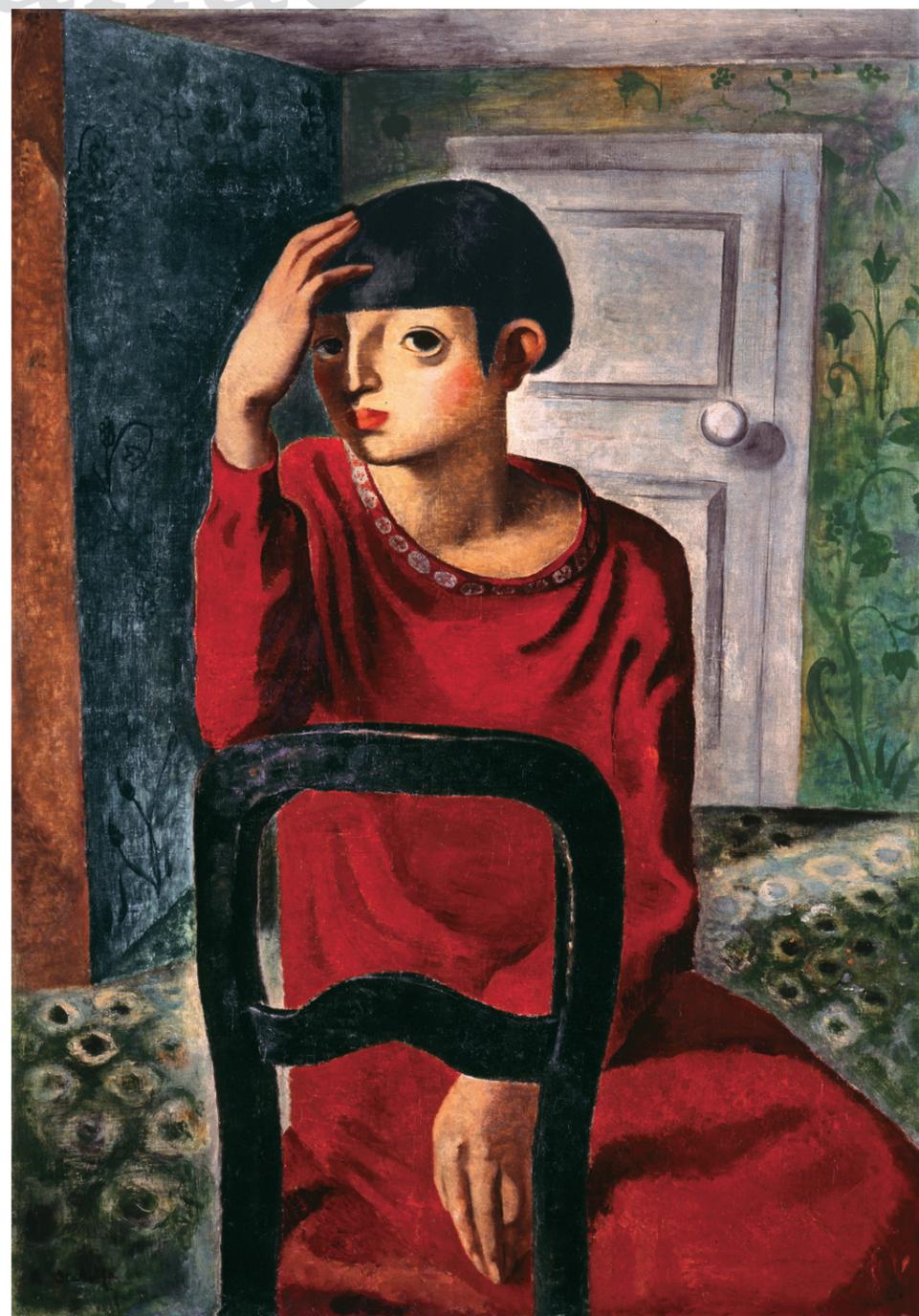
メルマガ会員募集中  
https://service.sugumail.com/mmat/



Kanae

画家・板倉鼎と妻・須美子、

永遠に若い二人の閃光のような物語



板倉鼎《赤衣の女》1929年 キャンバス、油彩 松戸市教育委員会蔵

1926年7月31日、午後4時のパリ。  
列車から降りた若く美しい二人の日本人。

よみがえる画家

板倉 鼎・須美子展

Kanae & Sumiko Itakura

2017年 4月8日(土) - 6月4日(日) 目黒区美術館

1927年、サロン・ドートンヌ。  
小さなカタログにある二人の日本人。

ITAKULLA(KANAÉ)とITAKULLA(SUMIKO)  
板倉 鼎と須美子…二人の物語がはじまる

1920年代、パリ。多くの日本人画家も暮らした芸術と文化の都に、一組の若く美しい日本人カップルが留学しました。板倉 鼎・須美子夫妻です。既に画家としての素養を積んでいた夫・鼎、そして夫の手ほどきで新たに絵画に取り組んだ妻・須美子は、ともに魅力的な油彩作品を次々に描き、多くの日本人画家が出品し、今日も続く展覧会、サロン・ドートンヌほかに出品を重ねました。しかし、過酷な運命は、鼎、ふたりの間の子ともたち、そして須美子の命を次々に奪ってゆきました。

三十歳を迎えることさえ叶わず早世した二人の存在は、広く一般に知られることはなく、長い年月がその姿を隠してきました。しかし、近年ようやく、永遠に若いままの二人の、閃光にも似た画業は、研究が進み、あらためて知られるようになってきました。

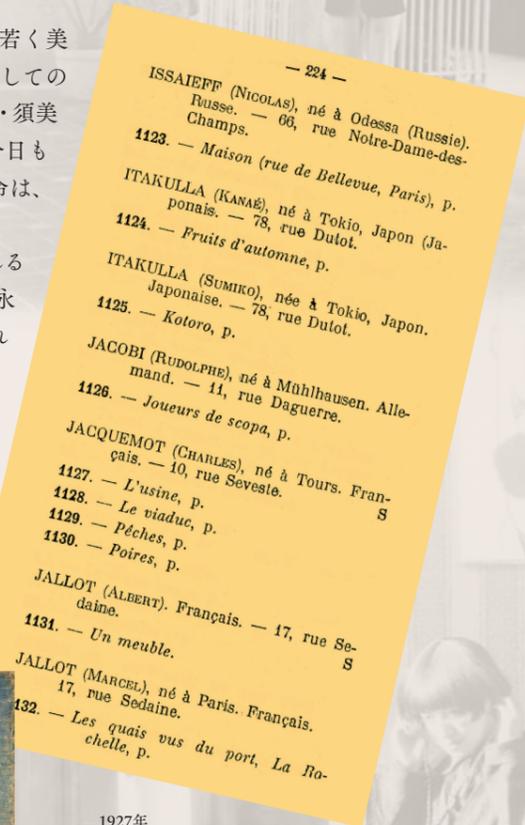
この展覧会では、2015年に開催された二人の初めての回顧展「よみがえる画家 板倉鼎・須美子展」(松戸市教育委員会主催)をもとに、二人の残した仕事をふりかえります。また、二人と親交の深かった岡鹿之助や伊原宇三郎をはじめ、当館所蔵の、同時代にヨーロッパ留学・滞在中の画家たちが描いた作品をあわせて展覧し、いまだ知られざる板倉夫妻の作品を中心に、当館が開館以来の収蔵テーマのひとつとしてきた戦前期の「画家の滞欧」の興味深い一側面をご覧ください。



板倉鼎《静物》1927年 キャンバス、油彩



板倉 / 昇 須美子《ベル・ホノルル 24》1928年 キャンバス、油彩



1927年  
サロン・ドートンヌ・カタログより

板倉鼎は1901(明治34)年に埼玉県北葛飾郡金杉村(現在の松伏町)の医者の家に生まれました。千葉県立千葉中学校で洋画家・堀江正章に学び、画家を志すようになりました。その後、1年浪人して東京美術学校(現在の東京藝術大学)西洋画科に入学。岡田三郎助や田辺 至の指導を受け、在学中の1921(大正10)年には早くも第3回帝展に初入選を果たしました。

1924(大正13)年に美術学校を卒業すると、翌年に歌人 与謝野 寛・晶子夫妻の媒酌で、昇須美子と結婚。1926年2月、須美子とともに横浜港から海外留学に出発し、アメリカ経由で目的地パリに向かいました。途中、ハワイ滞在中には現地の風物を描き、日本人会の支援で個展を開催しています。その後、東海岸から大西洋を渡り、7月にパリに到着。翌年からはアカデミー・ランソンでロジェ・ピシエールに師事しました。やがて、それまでの師・岡田三郎助の影響のみられる温厚な写実から、モダンで華やかな構成的な画面へと大きく作風を変え、サロン・ドートンヌやサロン・ナショナルに入選。アンデパンダン展やパリ日本人画家協会展にも出品、パリから送った作品で帝展にも再び入選するなど、将来を嘱望されるようになりました。しかし、帰国予定を目前にした1929(昭和4)年9月、歯の治療中に敗血症となり、惜しくも28歳の若さでパリに客死しました。



1



2

1. 板倉 / 昇 須美子《午後 ベル・ホノルル 12》1927~28年頃 キャンバス、油彩
2. 板倉 / 昇 須美子《松の屋敷》不詳 キャンバス、油彩
3. 板倉鼎《木影》1922年 キャンバス、油彩
4. 板倉鼎《金魚》1928年5月頃 キャンバス、油彩

※いずれも松戸市教育委員会蔵



3



4

一方、鼎の妻となった昇須美子は、1908(明治41)年、ロシア文学者・昇曙夢(1878-1958)の長女として東京に生まれました。文化学院の創立と同時に入学し、山田耕作に師事し音楽を学びますが、1925(大正14)年に中退し、17歳で板倉 鼎と結婚。須美子が絵画制作を始めたのは、1927(昭和2)年にパリで鼎の手ほどきを受けてからですが、ハワイ時代の思い出をナイーブな感性でとらえた作品で、同年のサロン・ドートンヌに早くも初入選を果たしています。この年12月には長女一を出産、育児に多忙な中でも制作をつづけ、翌年にもサロン・ドートンヌで連続入選を果たしました。しかし、1929(昭和4)年には二女二三を得たものの一月あまりで亡くし、同じ9月には夫 鼎も失うこととなります。この年、鼎の友人たちの援助で、幼い長女一を連れて帰国した須美子でしたが、翌年にはさらにその一も病気で失い、失意のうちに鎌倉・稲村カ崎の昇家に戻りました。その後は再出発を期して、近所に住んでいた有島生馬に改めて絵画指導を受け、絵画への意欲を持ち続けましたが、結核を発症し、1934(昭和9)年5月、25歳でこの世を去りました。

\*

本展では、海外で過ごした短期間のうちに大きな変化をとげた鼎と、その鼎の手ほどきで、やはり短期間に独特の魅力あふれる作品を生み出した須美子の、知られざる画業を多くの作品でご覧いただけます。また、二人をめぐっては、須美子の父・昇 曙夢や媒酌人の与謝野寛・晶子夫妻をはじめ、文学者など多彩な人々の名をみることができます。また鼎の師である堀江正章や岡田三郎助、パリ時代の鼎の友人となり、鼎の没後は須美子の帰国や遺作展の開催を助けた岡鹿之助、伊原宇三郎など同時代の多くの画家との関係にも興味深いものがあります。本展では、こうした人々と板倉夫妻の関係についても作品と資料でご紹介します。